

【北海道版】人財確保の好事例から考える福祉人材戦略

～調査研究を起点にした、LINK とスピノフ～

都道府県：北海道 会員施設名：障がい者支援施設グリーンハイム
(北海道ブロック 調査・研究委員会)

発表者氏名：総合施設長 平松 朋紀 (北海道ブロック 調査・研究委員長)

I. 研究目的

近年、福祉分野における人材確保は、全国的にも喫緊の課題となっている。少子高齢化の進行や都市部への人口集中、他産業との人材獲得競争の激化等により、一層困難な状況にあります。一方で、利用者ニーズは多様化しており、質の高い支援を安定的に提供するためには、専門性と意欲を兼ね備えた人材の確保・育成が不可欠だ。

本調査研究事業では、北海道身体障害者施設協議会に加盟する道内の施設・事業所を対象に、人材確保の現状と課題、課題解決に向けた取り組みの実態を調査し、厳しい環境下においても創意工夫を重ね成果を上げている「人材確保の好事例」を収集・整理することを目的とした。得られた知見を「人財確保の好事例集～現場の知恵と工夫、集めました～」として取りまとめ、加盟施設・事業所にフィードバックすることで、今後の人材確保・定着の取り組みの発展に資することを目指した。

II. 研究方法

「介護・福祉人材の不足への対応」をテーマに、アンケート調査及び聞き取り調査を実施した。

(1) Google フォームを用いたアンケート調査 (令和 7 年 1 月 7 日～3 月 31 日)

- ・人材確保 (職員配置・採用・定着) に関する現状
- ・採用力強化および定着促進に向けた今後の方策
- ・IT・ICT、介護ロボットの導入状況

(2) 好事例の深堀り (聞き取り) 調査 (令和 7 年 7 月～9 月)

採用・定着、介護ロボットや特定技能制度の導入、雇用の多様性、定年制度の見直し、SNS 活用による情報発信等をテーマに、先進的な取り組みを行っている施設・事業所への聞き取り調査を実施

III. 研究結果 IV. 分析・考察

調査結果の集約および好事例の深堀り調査 (8 事例) を通じて、各施設・事業所が自らの理念と地域性を踏まえ、工夫と挑戦を重ねている実態が明らかになった。人材確保においては、採用活動そのものに加え、IT・ICT・介護ロボットの活用による業務の効率化・合理化、業務整理によるタスクの細分化など、多面的な視点が重要であることが示唆された。また、福祉の現場で働く意義や魅力を丁寧に創り、育て、発信していくことが、将来の福祉を支える人材を呼び込む土壌となると考える。

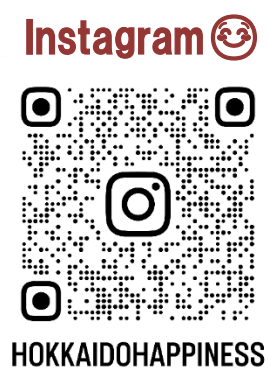
さらに、本調査研究事業の成果を踏まえた発展的な取り組みとして、障がい福祉の魅力や職場のリアルを広く発信するイベント「fuku  link Expo2025」を北海道身体障害者福祉施設協議会主催により開催 (企画、運営) した。小規模ながらも、研究成果を社会に還元する実践的な試みとして大きな意義を有する取り組みとなった。本発表では、調査研究の概要に加え、「fuku  link Expo2025」の開催概要についても報告する。

「人財確保の好事例集～現場の知恵と工夫、集めました～」

※事例等の使用は利用者本人 (家族) の承諾を得ています。



下記QRコードよりダウンロード可能です。
期間は2026年12月31日（木）までとする。



※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

死んでもいいから帰りたい

～日常の積み重ねと対話が支えた、大きな意思決定～

都道府県：愛知県

会員施設名：ひかりのさとのおもいの家

発表者氏名：長坂 俊治

I. 研究目的

本研究の目的は、重度高齢化に伴い医療的ケアが必要で、理解力に一部不十分さのある方の最期において、生命リスクのみを判断基準とせず、本人の意思や大切にしてきたことから推定される「その人らしい選択」を実現することである。

重度障害のある方は日常生活において選択肢が狭まりやすく、「安全」や「リスク」を理由に本人の意思よりも周囲の判断が優先されてしまうことがある。この傾向は命に関わる局面ではさらに強まり、「どれだけ長く生きられるか」という視点に偏りやすい。

しかし、人生の最終段階だからこそ、その人が何を大切にしてきたのか、どのように暮らしてきたのかを踏まえた意思決定が尊重されることに、大きな意義があると感じる。

本研究では、本人の意思を「結果」だけでなく、どのように確認・推定・共有し、施設として決断に至ったかというプロセスを重視した。

II. 研究方法

本研究は、入院中に鼻腔栄養が困難となり、病院より「点滴を行い少しでも長く生きるか、点滴を外し施設で看取りを行うか」という二択を迫られた状況から始まった。

本人の意思については、本質的な死生観・意思を確認する必要性が高く、体調変化に合わせて日程調整を丁寧に行い、分かりやすい言葉や大きな文字での説明を複数回行った。それは、施設での看取りは、死期を早めてしまう可能性が高い重大な意思決定であったからこそ、慎重な検討が必要だと感じていたためである。「本当に死期が早まる可能性があるが、それでもよいか」と確認した上での本人の言葉が「帰りたい」であった。

家族として主に関わっていた兄にも病状説明が行われ、「点滴を外してでも、長年暮らした施設に戻せたい」「これ以上はかわいそう」との意向が示されていた。長年の入所生活を踏まえ、本人の「帰りたい」を尊重する姿勢が共有されていた。

ご本人やお兄様の言葉を受けて、施設としては点滴が困難のため「看取りの場合、数日で亡くなる可能性があること」「本人がどこまで理解できているかが不明確なこと」も含め、「それでも本当に施設に帰りたいという、看取り希望」が「本人の意思と選好に基づく最善の解釈」となりうるのかについて、職員への意見収集を行った。

職員の意見は分かれ、「病院であれば医療的対応が早く苦しみを軽減できる可能性が高い」という意見と、「慣れ親しんだ環境や顔なじみの職員に囲まれることが精神的な安心や苦しみの緩和に繋がるのでは」という意見が共有された。

また、「本人の理解度は憶測でしかない」「他の方への支援もある中で、十分に最期に寄り添えるか」という声もあり、責任の重さや、判断の難しさが共有された。それでも、必要時には管理職が付き添うことなども含め、体制としては受け入れ可能であり、何より「亡くなることを正確に理解していないとしても、施設に戻ることを望んでいるのではないか」「Aさんの『帰りたい』を尊重したい」という多くの共通意見を重要視した。

こうした対話を重ねるとともに、連日の面会を通じて意思確認を継続し、これまでの生活歴や本人らしさを振り返った結果、「本人は、その時自らの意思で選択したことについて、後に不利益や苦痛が生じたとしても、他者を責めることのない方であった」というこれまでの生き方が再確認された。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

そのため、本人に何度確認しても「帰りたい」と言われたことから本人の希望の実現を私たちが支援することが重要であると考え、看取りの受け入れを決定した。

病院へ直ちにその旨を報告し、本人にも退院できることを伝えにいくと、状態が芳しくなく、白目がちで眠り、今にも旅立ちそうな状態に見えた。そのため、意思確認と同時に、わずかでも生きる力に繋がることを願い「早く帰りたいですか」と尋ねた際に、本人からはっきりと返された言葉が【あした】であった。

この一言を受け、急遽その場で看護、管理職、事務、勤務体制を総合的に整理し、退院を予定より前倒しする判断に至った。

その判断を後押し、即座に決定できた要因の一つが、最も精神的負担が想定される退院日である翌日の夜勤者が、B・C 男性支援員という、いずれも A さんのこれまでの生活や人柄をよく理解し、信頼できる職員であったことである。

C 支援員は 4 年目ながら A さんの担当であり、「ご本人が帰りたいと言っているなら、帰らせてあげたい」と発言していた職員であった。また、B 支援員は、A さんを 20 年以上支援してきたがゆえに、「本当に死期を早めることになっても良いものか」「苦痛が生じないか」と葛藤を抱いていたベテラン職員であった。その上で、「全力で応えます」と受け止めてくれたことは、看取りを支える大きな力となった。

Ⅲ. 研究結果

A さんは、住み慣れた環境に戻り、仲間や職員に囲まれながら、穏やかな時間を過ごされた。昔働いていた、古くから知る職員の面会も多く、職員に代わって側で手を握り続けてくださる場面もあった。

点滴を外した状態で、一般的には 72 時間、長くても 1 週間の命と言われる中で、10 日間にわたり穏やかに過ごされ、最期は、大好きな職員に手を握られ、家族に見守られながら迎えられた。

また本実践を通して、職員の中で意思決定に対する捉え方が大きく変化し「リスクがある中で、本人の意思についてどう考えるか」という視点が共有されるようになった。

その後の支援では、2 名の方の看取りだけでなく、リスクがあっても胃ろう造設を選ぶ方の意思をどう代弁するかや「死んでもいいから普通食を食べたい」という方への向き合い方、また、酸素が付いていても退院したい、コンサートに行きたいという希望など、表面的なリスクのみで判断しない支援姿勢が現場全体に広がっていった。

Ⅳ. 分析・考察

本研究から得られた重要な学びは、最期となった大きな意思決定は、日頃の小さな意思決定や本人がどのように生きてこられたかの延長線上にあるという点である。

「何を着たいか」「何時に起きたいか」といった日常の選択を尊重してきたからこそ、「死んでもいいから帰りたい」という思いが紡がれ、受け止めることができた。

また、意思決定支援はサビ管や施設長個人の判断に委ねられるものではなく、多職種・多角的な対話を通じて、「本人はどうありたいか」を捉えることが不可欠である。

不安や葛藤も含めてまずは受け止め、本人を支えるための「大切な思い」として共有し続けたことが、最終的にチームとしての覚悟と理解につながったと感じる。

命に関わる意思決定には正解はない。しかし「その人らしい人生」を考え続けた過程そのものが、支援の質を高めるということを実感でき、少なくとも、私たちは、本人の意思を尊重しようとしたこと、その意思が何であるかを皆で考え抜いたこと、慣れた環境で穏やかに最期を迎えられたことへの意義を感じられた。そして、それを経験させてくれたご本人への感謝が支援者を支え、更なる成長へと導いてくださるのだと考える。